

職人の技を受け継ぎ歴史・文化を継承する 金沢職人大学校だより

◆金澤町家の改修に職大修了生の力を結集したい！

金沢市では、昭和25年までに建築された木造建築を金澤町家と称し、それらを大切な歴史的資産として改修・活用していくための諸施策を展開しています。2017年調査では約6000軒の金澤町家が残存し、うち1000軒近くが空き家で、また約100軒が毎年取り壊されていると推定されました。

取り壊される理由は様々ですが、相続時が多く、また、歴史的建築物は、古い、寒い、暗いなどのイメージもあり、地震に弱いとも考えられています。しかし、歴史的建築物であっても、腐朽した部材を取り換え、断熱性を高めて新しい設備機器を整備すると、新築住宅と遜色ない暮らしができます。近年の学術研究では一定の耐震性を持つことも実証されています。それら以上に、なにより

親しんできた建物が蘇り、身体にやさしい和の空間が再生されることが大きいと思われます。

しかし、多くの所有者にとっては、空き家の金澤町家など改修や活用はどう対応したらよいかわからないと思います。金沢市では、それらを改修したり流通させたりするための各種の支援を行っています。金澤町家情報館では、そうした相談に対応しています。また、職大修了生の方で改修等の依頼に対応いただける職人や建築設計士の方々のリストも保管しています。ぜひ相談いただければと思います。
(川上光彦)



「縁付金箔後継者育成支援プログラム」の開講

ユネスコの無形文化遺産に登録された「縁付金箔製造」の技術継承を図るため、金沢職人大学校において令和3年10月19日に「後継者育成支援プログラム」の開校式(右写真)が行われました。現在4名が受講中です。令和3年度はプレ講座として実施し、令和4年度から本講座への移行が予定されています。

当プログラムに係る事業の予算、所管は金沢市であり、運営主体は金沢金箔伝統技術保存会となっています。なお、当プログラムについては、令和

4年3月30日開催の理事会に諮り、承認されたので、令和4年度から『職大の特別講座』として位置付けすることになりました。今後は金沢市の担当課(文化財保護課)等と連携し、情報発信に努めてまいります。



市民公開講座

昨年10月3日(日)に開催。新型コロナのため例年の半分の定員募集で45名の参加。当日は天候に恵まれ、造園科では黒松の剪定・雪吊り・縄の結び方の体験実習をしました。参加者からは家の庭を自分で手入れしようと参加したが思ったより難しく、やっぱりプロに頼んだほうが良いわと笑っていました。瓦科では18歳の青年の参加もあり、貴重な体験が出来たと喜んでいただきました。



庭園探訪

昨年11月7日(日)に西田家玉泉園、成巽閣飛鶴庭、松声庵庭園、寺島蔵人邸庭園で開催。新型コロナのため例年の半分の定員募集で35名が参加。松声庵は茶人金谷三次郎邸の建物を油谷定吉の邸宅を経て2001年に表千家茶道家中林宗代邸に移築。造園科山名講師が説明。

お庭が好きな方が多く、毎年参加されている方もおり、講師にいろいろと質問されていました。



◆ 本科：第9期生(2020年10月入学)の研修内容

本科の9科計42名が、月数回、夜間や土日に研修しています!

石工科

御影石の課題製作をしていました。現在は機械による加工がほとんどで、今回1日1面を手作業で行っていましたが、大変難しいとのことでした。

御影石は、一般的に花崗岩を石材として呼ぶときに使われる名称で、神戸市の御影の港から日本各地に輸送されたことから御影石と呼ぶようになりました。硬さや耐久性にすぐれている石材です。



講師の指導により御影石を加工

左官科

腰壁洗出下地塗・目地割出を行っていました。腰壁とは腰高程度に張る壁仕上げのことで、洗出とはセメント等が硬化しないうちに表面を水洗いして小石等を表面に浮き出させるものです。壁の他に、玄関の入口部の土間などにも使われます。

研修生の皆さんは、自分の出来栄に結構、満足されているようでした。

今後の研修も頑張ってください!



作業風景 それぞれ個性が出ます

大工科

彫刻で六葉(ろくよう)を製作しました。六葉とは6枚葉を六角形に模様化したもので、社寺の破風板(はふいた)に下がる懸魚(けぎょ)を止めるための材です。手作業で道具を使って製作していましたが、完成した方の作品を見せてもらうと大変すばらしい出来栄で、さすが大工! 私なんかじゃ、どれだけ時間があっても到底出来る代物ではありませんでした(笑)。



六葉を製作する研修生

瓦科

大架台の片入母屋(いりもや)屋根を作っていました。入母屋屋根とは日本建築の伝統的な屋根の形で、社寺仏閣や伝統的な農家建築などに多く見られません。

屋根全体では、最低2人で2ヶ月から半年かかるそうです。通常、瓦は釘もしくは針金で緊結します。取材当日、金沢は雪が多く、仕事にならんとぼやかれていました。



片入母屋の製作研修

造園科

石積み作業は通常の仕事では経験したことが無く、2.5トンの石から石積みに適した石を探すのに大変苦労していました。石積みには野面積み・崩れ積み・コバ積み等ありますが、現在では石積みの仕事は限られ、地元でも得意な造園業者は少ないそうです。石積みの2段までが大変で1日で4段を目標に頑張るそうです。



石積み作業を学ぶ研修生

畳科

三日連続で「手縫い畳床製作」の授業を行いました。畳床(たたみどこ)とは畳の芯となる部分のことで、わらを重ねて麻糸で締めたもののことです。わらを6層積み重ねて圧縮したものを用い、適度な弾力性、わらの香りがし、吸湿性にすぐれた伝統的な畳床です。

この上に畳表を張り付けて畳が出来上がります。この3日間で県外から10名を超える方が来校されました。



手縫い畳床製作の風景

建具科

左官科の依頼で炉壇を製作しました。炉壇とは、茶席に必要なもので、畳の一部を切って炉を設けたものです。檜で製作し、その内側に左官が土壁をつくり完成させます。家具製作会社に勤めている研修生が、今回初めて炉壇を製作しました。道具の使い方も初めてでなかなか苦戦しているようでした。でも伝統的な技術を修得出来るのがうれしくていつも授業を楽しみにしているそうです。



炉壇を前に奮闘する研修生

表具科

毎年恒例の寒糊吹きが本年1月22日に行われました。1年の中でも特に寒い大寒の時期に井戸水の雑菌が少なくなるため、この時期に行います。寒糊は掛軸や巻物などで和紙で裏打ちする際に使われるもので仕上がりがしなやかで修復のためにはがしても傷つきにくいのが特徴です。当日は金沢学院大学の飯田教授と生徒さんも見学に訪れ、寒糊吹きを体験する方もいました。



寒糊吹きを行う研修生

◆ 修復専攻科の研修内容

感染防止を踏まえた研修となりました。

写真撮影の研修では、建築写真家の指導を得ながら演習に取り組みました。専門技術の研修は市内2箇所に分かれての研修体制となりました。某家での研修には左官・畳・建具・建築士・行政職員が、柱の傾斜と不陸から建物の破損傾向を把握するための演習、柱の断面寸法と柱間寸法から建物の計画方法を考察する演習に取り組みました。

県指定文化財の天徳院山門での研修には、大工・板金・瓦の職人が取り組みました。大工は組物と軒廻り、板金は軒付けに残る鉛瓦の痕跡、瓦は本瓦葺を通して調査演習に取り組みました。



某家での専門技術研修

板金科

鯨鯨(あんこう)は雨樋の落し口です。現在はたまにこだわりのある方や既存のものの修復程度だそうです。下田講師の話では「自分らのときには同じ鯨鯨の見本を見て製作していたが、現在は自分たちでデザインし展開図を書いて製作する」そうです。1週間から3ヶ月かかるものもあるそうです。

研修生全員が今回初めて製作すること、いつか作ってみたいと思っていたそうです。



鯨鯨を製作する研修生

子どもマイスタースクール

新型コロナでのびのびになっていた金沢湯涌江戸村の紙すきと金沢湯涌創作の森の「金沢から紙」のスクリーン印刷に行ってきました。紙すきの和紙は生徒さんが製作しているミニ衝立の障子紙に、「金沢から紙」は壁紙になります。また紙すきの和紙は2年間子どもマイスタースクール修了にもなり、本年4月23日に修了式が開催されます。



文化財建造物修理技術者研修

昨年11月15日から4日間、文化財建造物の保存修理業務に従事する中堅技術者8名の研修が当校で開催されました。木の研修では、槍鉋や大鋸による製材と障子の組子を使った木組みの実技演習。石の研修では、原石の打割りから石積みまでの実技見学と石材加工等の演習。畳の研修では、古い畳床の締め直しの実技見学と畳の解体調査演習。瓦の研修では、古い棧瓦の選別から架台による瓦葺までの実技演習を実施しました。職人の伝統技術を直に学べる場所は他に無く、当校の活動が国の専門家の後継者育成にも役立ちました。



旧川縁米穀店の紹介

藩政末期頃に建てられた町家で、1989年に市指定保存建造物に指定。現在は金澤町家情報館として活用されており、この改修に先立って修復専攻科4期生が調査をしました。その結果、隣家と壁を共用していたこと、ナガシだけでなく座敷の床下にも井戸が発見されたことなどから、元は数戸の住居が連なる長屋である



発見された創建時の柱

ことが判明しました。また起振機を用いて建物を振動させ、その測定データを考察した結果、畳と建具が振動を抑制し、建物の一帯性を確保していることが確認できました。金澤町家の歴史的な変遷と伝統工法のしくみを解明しました。

修了生の研究会／左官塾

元左官科講師代表の中村康氏の技術と知識を修得することを目的に2012年に発足。2013年、長町用水沿いの千田家土塀修復業務を行うことになり、中村氏の技術指導を仰ぎながら研究会の活動が開始。これをきっかけに金沢老舗記念館、中央公民館

長町会館、武家屋敷跡野村家等の土塀修復、また土塀修復の為の粘土採取業務、奥村家（宗家）上屋敷土塀の調査補助等の活動



土塀修復の様子

をしながら版築土塀の研究活動を行いました。左官塾は左官職だけでなく設計士や行政職員も参加しています。今年は10周年の節目を迎えます。（左官塾会長／吉村収司）

【編集後記】

職大の役割も、本号で紹介したように、文化財修復技術者の全国的な研修の場としても活用されるように広がっています。修了生は、本科378名、修復専攻科277名と多くなり、金沢市や市民の大きな財産になっています。この全国的にも稀有なマンパワーをぜひ金澤町家などの改修に活かしたいものです。すでにそうした改修を担っている方もおられるのですが、毎年多くの建物が取り壊されている状況を見ると、さらにその力をと思い、願っています。（M.K.）

修了生の紹介／平野甚九郎氏

平野氏（67歳）は本科第2期生（左官）、修復専攻科第2期生で、本科講師を担当。能登町宇曾平野家30代で初代の名を継承。叔父が働いていたことからイスルギ大阪支店で6年修行しその後本社で勤務。8年ほどで「人についていける」と感じた。30代半ばより歴史的建築の修復に関わるようになり、金沢城五十間長屋の復元、総持寺祖院の修復等を担当。「昔の人の仕事ができる」のが興味深いとのこと。黄綬褒章、現代の名工等を受賞された。イスルギを定年退職後も仕事をさせてもらっている。「孫が継ぐかも知れない」と目を細められる。



講師（大工科）紹介 中村清光氏

今回は大工科講師代表の中村清光氏を紹介いたします。中学を卒業後、4年間親方の元で修行、27歳のときに独立、53年間活躍しています。大工の他に、当校以外で、金沢市立工業高校や訓練校等でも講師を務められ、また、黄綬褒章や現代の名工等受章しています。「早く・綺麗に・正確に」をモットーに弟子3人を育成されました。若い時は全然飲めなかったそうですが、その当時の親方に「酒も飲めんもんは一人前にはなれん」と言われ、現在では毎日、コップ一杯の日本酒を楽しみにしています。



研修生を指導する中村清光氏

「金沢職人大学校だより」No. 05、2022年4月

【発行・問合せ先】

公益社団法人 金沢職人大学校

理事長・学校長 川上光彦

住所：金沢市大和町1番1号

（金沢市民芸術村の一角にあります。）

Tel 076-265-8311 Fax 076-225-8314

Webサイト <http://www.k-syokudai.jp/>

事務局：平日9:00～17:00、土日・祝日休み

